

話本と「通俗類書」

——宋代小説話本へのアプローチ——

大塚秀高

前 言

宋代小説話本を研究するには二つの方法がある。一つは元代以降に成立したと思われる口述筆記の類、「話本」によるものである。この方法によれば話本の語り口はよくわかる。しかし、それが宋代の話本のものであるとの保證がないという缺點がある。もう一つは小説人の種本によって研究するものである。この方法では話本の語り口はわからない。が一方、その内容についてはかなり正確にわかるといふ利點がある。この二つの方法を併用すれば、宋代小説話本はかなりの程度まで明らかにできるのである。しかし、今まではこの二つの方法への認識があまりだつたように思える。多かれ少なかれ馮夢龍による改變をへた三言中の「讀本」をもつて、いきなり話本、特に宋代の話本を論ずるのは危険であるにもかかわらず、平氣でこれがなされてきているように思える。「讀本」を利用するには、慎重な手續がいろいろある。そのうえ、それにも限界はある。とすれば、語りものとしての宋代小説話本を論ずる際には、なるべくこれを利用しない方がよい事にならう。しかし、現存している「話本」の數が限られていることもあり、小論でも「讀本」を論據とせざるをえない場合も多々あつ

話本と「通俗類書」

た。

小論の最終的な目的は、宋代の話本をできうる限り復原する事、及びその方法を述べる事にあるが、まず「話本」により、「話本」期の話本から考えてみることにしたい。

一

ところで、現存する「話本」の中に『清平山堂話本』及び『熊龍峯四種小説』(以下『清平山堂』・『熊龍峯』と略記する)所收のものが入るのは、衆目の一致するところであらう。しかし、この二つのシリーズ所收のものほかに、いくつかの「話本」が現存している事は案外知られていないらしい。孫楷第により、「通俗類書」と命名された書物の中に見出だされる「話本」がそれである。これらの「話本」には『清平山堂』や『熊龍峯』所收のものと同等の注意が拂われてしかるべきなのだが、なぜかこれまで等閑視されてきた。まず調査の對象とした「通俗類書」を列挙し、その後これらに收められている「話本」の一覽表をあげてみよう。(表中の★印は文言に近い部分があるもの、△印は不完全なもの意味)

(A)京臺新饒公餘勝覽國色天香 十卷(一名『新饒幽閑玩味奪趣群芳』)

<small>通俗類書 名はか （略稱）</small> <small>「原本名」</small>	張于湖	玩江樓	裴秀娘	紅蓮女	東坡佛印	綠珠	鄭元和	杜麗娘
國色天香(A)	張于湖傳 卷十	玩江樓記 卷一	裴秀娘夜遊西湖 卷二	★月明和尚度柳翠 卷八	△東坡佛印二世相 卷十二			
萬錦情林(B)	張于湖宿女貞觀 卷一	柳耆卿甌紅樓記 卷四						
繡谷春容(C)								
林本燕居筆記(D)	題 同卷六	題 同卷六	裴秀娘夜遊西湖 卷五上			△綠珠墜樓記 卷八	△題 卷五上	
何本燕居筆記(E)	張于湖宿女貞觀 卷九	△柳耆卿甌江樓記 卷十		紅蓮女淫玉通禪 卷九		題 同卷十		杜麗娘慕色還魂 卷九
馮本燕居筆記(F)	張于湖宿女貞觀 卷七記	題 同卷七		★柳府尹遣紅蓮計 卷八	★東坡佛印二世相 卷九	題 同卷八	仙記 鄭元和嫖遇李亞 卷七	★杜麗娘記(一名 杜麗娘牡丹亭 卷八)
『書目』類	張于湖悞宿女觀 卷七記	柳耆卿序 甌江樓記		紅蓮 柳翠?	五戒禪師私紅蓮 記	綠珠記	李亞仙記	杜麗娘記
清平山堂話本		柳耆卿詩酒甌江 樓記						
『讀本』との關係		『古今小説』卷 十二「衆名姬春 風吊柳七」の挿 話		『古今小説』卷 二十九「月明和 尚度柳翠」の前 半	『古今小説』卷 三十一「明悟禪師 趕五戒」の前半	『古今小説』卷 三十六「宋四公 大鬧禁魂張」の 「入話」	『醒世恒言』卷 三「賈油郎獨占 花魁」の「入話」	

吳敬所編輯、金陵・萬卷樓 萬曆十五年原刊、二十五年重刊。

(内閣文庫)

(B)新刻藝密彙爽萬錦情林 六卷 餘象斗纂、建邑・雙峯堂 萬曆二十六年刊。⁽⁶⁾ (東大文學部)

(C)選鏗鑿壇樵粹嚼麴譚苑 十二卷(一名『繡谷春容』) 起北齋輯、建業・世德堂刊。⁽⁶⁾ (東大東文研雙紅堂文庫)

(D)新刻增補全相燕居筆記 十卷 林近陽編、閩建・萃慶堂刊。⁽⁶⁾ (内閣文庫)

(E)重刻增補燕居筆記 十卷 何大掄編 金陵・□盛堂刊。⁽⁷⁾ (内閣文庫)

(F)增補批點圖像燕居筆記 十三卷 馮夢龍增編、餘公仁刊。⁽⁶⁾ (宮内廳書陵部)

これら八種の「話本」は、裴秀娘を除き、すべて『寶文堂書目』(以下「書目」と略す)などに著録されているうえ、裴秀娘自體も『醉翁談錄』の「小説開關」に列擧される小説演目中の夜遊湖の直系と考えられるものであるから、いづれも話本研究の貴重な資料たりうるのである。一方「讀本」研究の資料ともなるのである。これらの點について、東坡佛印・綠珠・紅蓮女の三つの「話本」を中心に、以下で考えてみたい。

二

東坡佛印 ここでは『繡谷春容』に收められる「東坡佛印二世相會(以下東坡と略す)」と馮本に收められる「東坡佛印二世相會傳(以下東坡傳)」とを、『清平山堂』の「五戒禪師私紅蓮記(以下五戒)」と比較してみよう。

前二者で最初に目につく「五戒」との相違は、「東坡傳」がやや文

話本と「通俗類書」

言に近い點と、「東坡」が佛印和尚の「四海尙容蛟龍隱」云々の詩で終っており、その後を缺いているという點であろう。しかし、これら以外にも、「五戒」の冒頭には

入話

禪宗法教豈非凡 佛祖流傳在世間
鐵樹花開千載易 墜落阿鼻要出難⁽⁶⁾

とあるのに、この兩者にはこれがないという點も目につく。このように冒頭に入話という文字を有するのは、「五戒」に限らず、『清平山堂』及び『熊龍峯』所收「話本」の特徴である。とすれば、これは「話本」の特徴とも考えられる。ゆえにこの文字及び詩の缺如は、「五戒」との重要な相違と言るのであるが、一般讀者に讀み物を提供する事を主目的とし、「話本」の保存をそれとしなかった「通俗類書」は、スペースの関係もあって、この部分を省いたとも考えられる。「東坡」の後半が缺けているのもその爲かもしれない。とすれば、字句の類似から考えて、「五戒」と「東坡」とは兄弟關係の「話本」である、とみなしてよいように思える。この兩者に比べ、「東坡傳」は簡潔である。すじに關係のない冗慢なところを削り縮めているからである。五戒禪師と紅蓮が出来合つてからの事などは「自是長老鎖藏之日、日則進食、夜則同歇」と簡單にかたづけられている。そのうえ、紅蓮の名も金蓮と變えられている。「東坡傳」に後人の手が入っているのは、これらの事から明らかであろう。とすれば、「東坡傳」は「話本」ではなく「讀本」ということになる。馮本は馮夢龍により増編されたとされるが、一方で馮夢龍はこの「話本」の後半を大幅に書き足し、かつ「三生相會」という「入話」を書き加えた「明悟禪師趕五戒」という「讀本」を作っている。「東坡傳」に後人の手が入って

るのが確かだとしても、それが馮夢龍であるとするのは問題がある。この點については改めて論じたい。なお、馮本所收のテキストがすべて「讀本」であるわけではない。躊躇なく「話本」とみなせるものの方が多し事は断わっておかねばなるまい。いづれにせよ、この「東坡傳」にも「五戒」を補える點はある。「五戒」の校訂は譚正壁により試みられてはいる。しかし、それも「東坡」及び「東坡傳」を用いておらず、とても充分なものとは言えない。この兩者により、新たな校訂の作業がなされることが必要であらう。

綠珠 東坡佛印の場合には、『清平山堂』の影印本・活字本の流布により、「話本」が馮夢龍により、どのように改變されて「讀本」になったかがよく知られていた。しかし、綠珠の場合にはこれと事情が異なる。綠珠の存在は、孫楷第によりいち早く指摘されてはいたが、『清平山堂』のように影印されることも、活字になることもなかったため、「宋四公大鬧蔡魂張」の「入話」になつてゐることは、あまり知られていないようである。もちろん兩者の比較もされてない。綠珠が本来獨立した「話本」であつたことは、『書目』に綠珠記とあるところから、ほぼ間違いない。一方、「讀本」では正文となつてゐる話の方も、『書目』に趙正侯興と著録される「話本」や、「小説開闢」で「也說趙正激惱京師」と言及される話本の後身と考えられる。すると、これも獨立した「話本」であつたことは間違いない。とすれば、馮夢龍は二つの「話本」、綠珠と趙正侯興を繋ぎ合わせ、一つの「讀本」、「宋四公大鬧蔡魂張」を作りあげたと考えられる。ではその際にどのような改變をして二つの「話本」と繋ぎ合わせたのだろうか、この點について、以下でみてみよう。なお、「讀本」との比較には何本所收のものを用いた。現存三種のテキストのうちでは、最

も古い姿を留めているように思えるからである。

「話本」と「讀本」の相違は次の二點に集約されるように思える。一、「讀本」には冒頭に「錢如流水去還來」云々の七絶があるが、「話本」にはこれがなく、次の七律があること。

靜裡書窗看古今 發揚壯士顯英靈

曾題流水高山句 時賦陽春白雪吟

世上是非難入耳 人間名利不關心

編成一段眞奇事 說與知音仔細聽

二、「讀本」は「石崇無言可答、挺頸受刑」のすぐ後に「胡曾先生……」とあるが、「話本」は、

後人論之曰、石崇今日之富被斬、因乃受老龍之囑、射死小龍王、而得敵國之富、亦果有此報。堪嘆綠珠如此貞烈、寧死於非命、而不受辱、清名標於萬古矣。

なる文がこの間にあり、胡曾詩で終わつてゐること。並びに「讀本」は胡曾詩で終わらず、次の文があつて正文に入つてゐること。

方纔說石崇因富得禍、是誇財炫色、遇了王愷國舅這個對頭。如今再說一個富家、安分守己、並不惹事生非、只爲一點慳吝未除、便弄出非常大事、變做一段有笑聲的小説。這富家姓甚名誰。聽我道來。這富家……

この二點のうち、後者の相違は當然とも言える。このように改變しなければ、二つの「話本」を結びつけることはできないからである。しかし、注目されるべきことは兩者の相違自體ではない。この「方纔……」の部分が、いまままで「話本」にもともとあり、「話本」期の小説人の實際の語り口があらわれているかのように思われていたが、實はそうではなかつたということなのである。この事實は綠珠と「讀

本」とを比較することによってのみ発見されうる。この八種の「話本」が「讀本」研究の資料ともなる、これは好例であろう。

なお、同様な關係として、『清平山堂』の「風月瑞仙亭」と兼善堂本『警世通言』卷六の「翁仲舉題詩遇上皇」の關係があげられる。とすれば、馮夢龍が二つの「話本」を結合させ、一つの「讀本」とした例はこれだけにとどまらないのでは、とも考えられよう。「入話」はもう一度洗いなおされる必要があろう。それでは、馮夢龍が二つの「話本」を結合させる際にお手本としたのは何だったのだろうか。それは『清平山堂』の「簡貼和尚」や「刎頸鴛鴦會」であり、『熊龍峯』の「張生彩鸞燈傳」であつたのであろう。

孫楷第はこの綠珠に對し、「文甚拙、或非此本（『書目』の綠珠記）」といつてゐる。しかし、「話本」は讀み物たる事を第一的として書かれたわけではないのであるから、文學的な面で完成してゐるとは考えにくい。それにもかかわらず、文がまづいから「話本」ではないといふのはすじがとおるまい。この孫楷第の意見は、改變をへて文學作品となつた「讀本」と「話本」との根本的な區別がつかないものといえよう。

紅蓮女 東坡佛印と綠珠の二つを合わせたような狀況が紅蓮女には存在する。この話は「月明和尚度柳翠傳」として『繡谷春容』に、「紅蓮女淫玉通禪師（以下紅蓮女）」として何本に、「柳府尹遣紅蓮計書禪師記」として馮本に收められてゐるが、これらを『古今小説』の「月明和尚度柳翠（以下度柳翠）」と比較すると、やはり大きな相違が認められる。ここでは口語に近く、より「話本」の面影を留めてゐると思はれる「紅蓮女」を、「度柳翠」と比較しつつ話を進めたい。「度柳翠」は次のように始まつてゐる。

話本と「通俗類書」

萬里新墳盡少年 修行莫待鬢毛斑
前程黑暗路頭險 十二時中自著研

這四句詩、單道著禪和子打坐參禪、得成正果、非同容易、有多少先作後修、先修後作的和尚。自家今日說這南渡宋高宗皇帝在位、……これに對し「紅蓮女」は

話說南度宋高宗皇帝在位主、……と始まつており、「入話」の一種とされる詩とその解説の部分がなない。本來、「話本」の冒頭には詩があつたと考えられるが、「度柳翠」の冒頭の詩は、馮夢龍の創作になるものではないかと考えられる。『清平山堂』の「戒指兒記」は、入話とあり、七律があつた後、すぐさま「自家今日說個丞相、家住西京……」と續けているのに對し、馮夢龍が改變した『古今小説』卷四の「閒雲菴阮三償冤債」では七律が七絶に換えられ、かつその後「這四句……」とその詩の解説（小説人の「講論」ではない）が増補されておき、この「度柳翠」とまつたく同じ形になつてゐるという事實があるからである。本來の「話本」には「話説……」の前に詩が當然あつたであらうが、「度柳翠」の詩がそれであるとは、このような狀況においては、うかつにはいえないように思はれるのである。

前半においてはこのほかに法空長老の眞言が「度柳翠」に増補されている以外、兩者に大差はない。しかし、柳翠の話に入ると、「紅蓮女」の内容は膠々たるものになつてしまふ。そのうえ、柳翠が母親と連れ込み宿をやり始めた事を述べ、「用巧計時傷巧計」云々の詩をあげた後、

後來、直使得一尊古佛來度柳翠、皈依正道、返本還原。觀者要知詳細的、請看月明和尚度柳翠。

なる文があつて全篇が終つており、「度柳翠」にある柳翠の坐化の話がない。この點に關しては他の二つのテキストも同様であるが、「話本」の題を考えれば、當然とも思える。二つの「話本」、紅蓮女と月明和尚度柳翠とを結合させ、後半の「話本」の名をとつた「讀本」を馮夢龍は作つたのではなからうか。そう考えれば、「讀本」が題と無關係な玉通と紅蓮の話を長々と述べている不自然さも救われよう。ただし、この二つの「話本」は姉妹篇のような關係であつたものと思われる。『西湖遊覽志餘』卷二十「熙朝樂事」に記される紅蓮・柳翠がこれにあたり、「近世所擬作」なのではなからうか。もちろん、孫楷第のようにこの「話本」を「非完本」とみるべきではないのである。馮夢龍は二つの同じ位の長さの「話本」を結合し、一つの「讀本」ともしたらしい。これと同様な例が三言中に更にあることも考えられる。大きく前後半に分かれる「讀本」には注意が拂われねばならないであらう。

三

次に、馮夢龍が「話本」を用いて「讀本」を作る際、どの様な意識を持っていたのかについて考えてみたい。「古今小説序」によつて考へれば、「鄙俚淺薄」なものは「讀本」に採用しない。採用する場合には大幅に改變を加え、「可以嘉惠里耳」なものにするという意識が馮夢龍にはあつたように思える。では「鄙俚淺薄」とみなされたのはどんな「話本」であらうか。「序」には甌江樓(記)と雙魚墜記(熊龍峯)の「孔淑芳雙魚扇墜傳」の二つだけが擧げられている。しかし、馮夢龍が「鄙俚淺薄」とみなした「話本」はこれにとどまらないだらう。「通俗類書」中の「話本」の多くが、何らかの形で三言と結びつ

くにもかかわらず、そのままの形では三言に收められていないのも、その證據であらう。これらの「話本」は、當時廣く知られた「話本」であつたことや、内容に「可以嘉惠里耳」なところがなかつたため、馮夢龍に「鄙俚淺薄」とみなされたものではなからうか。鄭元和はこの部類の代表であらう。

鄭元和は自行簡の「李娃傳」にもとづき、唐代すでに「一枝花」として説話人に語られ、「小説開闢」の小説演目にも李亞仙と名があげられ、『書目』にも李亞仙記と著録されているほどの有名な「話本」であるが、馮夢龍は『醒世恒言』卷三「賣油郎獨占花魁」の「入話」の中で簡略に觸れているにすぎない。しかし、馮夢龍に價値を認められなかつたからその「話本」に價値がない、という事にはなるまい。説話の原點ともいべきこの「話本」が現存しているという事は、それだけでも充分に價値があるのである。鄭元和はそれでも「讀本」の「入話」の中で言及されている。だがそれさえもなされなかつた「話本」もある。張于湖・裴秀娘及び杜麗娘がそれである。この三者に對し、馮夢龍がどう考えていたか、直接の記述からは知ることが出来ない。馮本の増編者が、その看板どおり馮夢龍であるならば、そこに收められるテキストと、他の「通俗類書」所收のものとを比較することにより、これをうかがうこともできよう。しかし、この點に疑問がある以上、「話本」自體の中にその原因を求めざるをえない。まずそのあらずじを記すことにしよう。

張于湖 張于湖は御忍びで金陵建康府尹に赴任する際、女眞觀に休息した。この女眞觀には陳妙常という尼がおり、張于湖はにくからず思ったが、妙常の方はすぎを見せなかつた。しかし、その妙常も遠來の觀主・潘法正の甥・必正と深い仲になり、妊娠してしまふ。あわて

た必正は墮胎薬を買いに城中に出掛け、そこで舊友の張于湖とあった。事情を知った張于湖は二人を指腹婚の間柄だったと言いつくろい、妙常を還俗させ、二人を夫婦とした。この話は『孤本元明雜劇』に收められる關名氏の「張于湖誤宿女眞觀」と同じものであり、「古今女史」にもとづく。

裴秀娘 南宋理宗皇帝の時のこと、臨安に住む太尉裴朗は清明節の日に妻高氏の申し入れに従い、娘の秀娘ともども三人で墓参をするため、城外の玉泉寺へ行った。そこで秀娘の目に宋玉の再來かと思える美少年の姿がうつった。秀娘はまばたきもせずこの少年を見つめ、こんな少年と夫婦になれたらなあと思つたが、親の目が氣になつて姓名も聞けずじまいであつた。一方彼の少年は劉員外のせがれで劉澄といつたが、これも秀娘にひと目ぼれ。墓参を終わった太尉は妻と娘をつれて西湖へもどり、遊覧としゃれこむ。劉澄ものがしはせじと一族のものと同別れ、小船をよとつて太尉の船をつけた。太尉は深酒をしたため、船中で夜をすごすことになつたが、その夜のこと、劉澄は機をみて小船を太尉の船に近づけた。これを目にして秀娘は詩を歌つて思いのたけを述べ、桃の實を投げた。その後家に歸つた秀娘は鬱々と樂しまず、病氣になり、夫人に問い詰められて劉澄のことを話す。夫人は太尉と相談し、王虞侯を使って身もとを調べさせ、劉澄を婿にとつた。こうして二人は團圓、望みをとげた。

最後の杜麗娘は湯顯祖の『牡丹亭還魂記』の藍本となつた話であるから、あらずは省略するが、以上三種いづれも才子佳人の戀物語であり、しかもハッピー・エンドに終わっている。そのうえ長い割に起伏がとぼしい。一讀すれば二度とみる氣になれない「話本」であり、風教にもよいとは思えなかつたのであろう。それで馮夢龍は三言中

に、この三つの「話本」を、雙魚墜記と同様に、取り入れなかつたのであろう。しかしながら、すでに述べたように、「話本」を研究するのは、その今日的意味における文學としての完成度を云々するためばかりではない。これらの「話本」がたとえ「鋪陳豔冶、結構亦平平」であつたとしても、話本研究には毫もさしつかへはないのであり、貴重な資料たることにかわりはない。しかもこれらは馮本を除けば、『熊龍峯』と同時期に成立した書物に收められているのである。にもかかわらず、これまであまり研究者に顧みられなかつたのは、「通俗類書」という低くみられがちな書物に收められていたためであらうか。

四

ところで、『清平山堂』及び『熊龍峯』所收の「話本」には、巻頭の缺けたものと「洛陽三怪記」を除いたすべてに入話という言葉がある。この入話という言葉について、ここで考えてみたい。

これまで「入話」に對し、正文の前にあり、それと類似した話、もしくは相反した話を述べたり、詩や詞を一つ、ないしはそれ以上ならばある部分、といったくらいの認識規定がなされてきた。しかし、こうした規定の仕方はずいぶんいいかげんだと言わざるをえない。

「話本」と、「讀本」や讀本とを同一のレベルで比較し、この三者において正文の前にあるものをすべて「入話」とみなし、そこから「入話」の概念を規定しようという考えがそもそも間違ひなのである。それこそ逆立ちした論理であらう。そこでこの章以降、正文の前にある部分をすべて指したい場合、今までもどおり「入話」と記し、「話本」の冒頭の入話という文字により本來の役割が暗示されているもの、す

なわちこれから論じたいと思つてゐるもの、を指したい場合、入話と記すことにしたい。

これまで「讀本」中の徳勝頭廻（または得勝頭回）とか、頭回とかは「入話」の別稱であるぐらゐにいわれてきた。しかし、入話と頭回はまったく別物であろう。「清平山堂」の「刎頸鴛鴦會」の冒頭に入話なる言葉があり、詩詞に續いた非烟の話の後に、この部分を指して「權倣個笑要頭回」とあるからである。少なくとも、「話本」期の小説人は正文（「話本」期の小説人が主たる話を何と呼んだかは、「話本」の中からはうかがえない。今、假に正文という言葉をこれにもあてておきたい。）の前にあるまとまった話の部分、それは概して正文より短かい、を入話と呼んではいかなかったとはいえよう。この部分を小説人は頭回と呼んでいたのではなからうか。それでは入話とは何か。入話という言葉には、ほとんどの場合、詩や詞が續く。例外は「瓊關姚下用諸葛」のみである。だとすれば、詩詞の前には必ず入話があったといつてもよいのではなからうか。それでは、この詩詞を入話という言葉は指しているであらうか。しかし、「錯認屍」は「入話竟」とあつた後に詩がある。同例はほかにはないが、他の場合もこれと同じに理解してよいように思える。たつた一つの詩や詞が入話であるとは考えにくい。小説人が話（頭回と正文よりなる。これを小論では假に「話本」と記すことにしたい）を始める前に、それと關係なく、勝手にままに、詩詞を誦みあげつつしゃべつたもの、それが入話なのではなからうかと考えられるのである。というのも、入話という言葉のない「洛陽三怪記」の始めの部分がそうなつてゐるからであり、入話本来の役割を變文における押座文と同じであるとするならば、それほどの話本にも必要なはずだからである。しかし、話本が「話本」化する

る際、多くの場合入話は書き残されなかつたのではあるまいか。それは入話の多くが類型化しており、いろいろの話本に差し替えがきいたからかもしれないが、小説人の腕のみせどころとして、その場で當意即妙に話すことが許されていたからとも考えられる。しかし、入話として何を話してもよいにして、「話本」で話すことは所詮決つてゐるのである。とすれば、この繋ぎが唐突になつてはまずかつたに違ひない。それゆゑ、繋ぎとなる入話の最後の詩や詞一首、もしくはそのペア、これは「話本」の始まりともいえるわけだが、は決つていたのでなからうか。これが「話本」に見られる冒頭のパターン、入話という言葉プラス詩詞、が意味するところではなからうか。だが「西湖三塔記」はこれにあてはまらない。入話と「話本」との移行のために、多くの詩詞が有機的な結びつきを持ちつつ使われていることになるからである。この部分の前に入話が別にあつたのかもしれないが、この部分こそが入話なのだと考えられよう。高度な語りの手順があつたり、「話本」との係わりから差し替え、或るいは當意即妙が許されない場合には、入話の部分もすべて「話本」の巻頭に書き残されたのではあるまいか。「西湖三塔記」のように入話を書き残されたと思われ例を「讀本」中から拾うなら、「警世通言」卷八「崔待詔生死冤家」、同卷十四「一窟鬼癩道人除怪」などがあげられよう。「西湖三塔記」の場合、入話という言葉はここには入話があるのだがその部分は省くという意味ではなく、ここから後の「話本」までの部分が入話である、という意味で使われているのであろう。以上をまとめれば、「話本」期の話本には「話本」に入る前に詩詞を主體として語られた部分があり、小説人はその部分を入話と呼んでいたらしいといふことになる。入話は伴奏をともなつていたかもしれない。小説

は別名を銀字兒と呼ばれたからである。なお、入話は閒話と呼ばれたとも考えられる。

ところで、このころの「話本」には頭回を持っているものがあることは先に述べた。頭回は正文に呼應し、正文となんらかの意味で関連する短かい話を述べていたのであるが、これがある程度以上に長くなると頭回とは呼ばれなかったらしい。頭回という言葉には軽いものというニュアンスが含まれているように思われるのと、それは關係があるかもしれない。この場合には正文を指し下回といったらしい。「張生彩鸞燈傳」の張生の話と張舜美の話の間に「且聽下回分解」とあるのがこの證據であろう。「話本」は頭回と下回によって構成されていたのかもしれない。しかし、下回なる言葉が上回や頭回と對應して用いられている例はない。おそらく、この言葉の意味は「續き」といったところなのであろう。それでは張生の話の部分、「入話」を小説人は何と呼んでいたのだろう。残念ながらこれについては「話本」中に記載がない。

なお、この「入話」と下回の間、頭回と正文の間には休憩が置かれていたらしい。この間に休憩を置くという習慣はひとつづきの話にもあったものと思われる。「崔待詔生死冤家」などがこの例ではなからうか。この「讀本」の場合、この言葉が残されていたため前後に分けられていたとわかるのであるが、もし刪去されていたら、この事實は葬り去られていたであらう。とするならば、三言所收の「讀本」中に、本來は「且聽下回分解」という言葉で前後半に分けられていたものがあつたかもしれない。ただし、ひとつづきの話よりなる話本を前後半に分けて語る理由は、二つの違った話を結合した話本を分けて語るのとは若干異なっていたかもしれない。この場合は二日に分けて語

られた可能性も考えられるのである。ところで、二つの話、當時すでに話本として成立していたと思われる、を結合してある「話本」には、「張生彩鸞燈傳」のほか、「簡貼和尚」がある。この「話本」は前半が「錯封書」、後半が「錯下書」と題される話本からなっている。とすれば、この間にも「且聽下回分解」とあつてしかるべきと考えられるが、この言葉はない。

這便喚做錯封書。下來說底便是錯下書。……只因這封簡帖兒、變出一本蹺蹺作怪底小說來。正是

塵隨馬足何年盡 事繫人心早晚休

なる繋ぎがあるため、この言葉は不必要だったのであろう。

それでは、宋代においては獨立していたと思われる二つの話本を一つの話本にするなどということが、なぜおこなわれたのであろうか。その原因として、元代における雜劇の勃興と、これに影響された小説の衰退との關係が考えられまいか。單純な話本では客をひきつけることができなくなり、このような工夫を小説人はしたのではなからうか。明末に、文學的な立場から、馮夢龍によりおこなわれた「話本」の統合と類似した行爲が、「話本」期には小説の人氣回復という立場から、小説人により、話本の統合という形をとりつつおこなわれたのではなからうか。

五

次に話本研究の第二の方法、種本によるもの、について述べてみよう。種本を集めた書物としては、『綠窗新話』と『醉翁談錄』が廣く知られており、それぞれ南宋末及び元初のものとして、いままでも利用されてきてはいる。しかし、「話本」や「讀本」と同じ話があると

いったような論じられかたしかされておらず、それらと種本の間の子の違いや種本とそれになった話との相違點に注目する論調のもの見當らない。これは話本の歴史に對する理解が足りない爲と思われ。以下、この點に留意しつつ種本について論じてみたい。

『清平山堂』所收の「藍橋記」は口語でなく文言で書かれており、「話本」ではなく、裴劍の『傳奇』中の一編、「裴航」を刪略した傳奇小説であるとみなされている。しかし、冒頭に

入話

洛陽三月裏 回首渡襄川

忽遇神仙侶 翩翩入洞天

とあり、末尾に

……正是

玉室丹書著姓 長生不老人家

とある點は「話本」に類似しており、單に傳奇小説と言うだけではすまないものが感ぜられる。そのうえ本文中にも問題點がある。樊夫人与裴航の會話中の「然亦與郎君有小々姻縁、他日必得爲姻懿」の句が「裴航」にはないのである。これはうかつには見過せない。この部分を『綠窗新話』の「裴航遇藍橋雲英」、「醉翁談錄」の「裴航遇雲英于藍橋」と比較してみると、兩者いずれにも同様の句があることに気がつく。

與郎君少有因縁、他日必爲配偶。

然亦與郎君有小小因縁、他日必得爲姻懿

『綠窗新話』

『醉翁談錄』

してみると、これら三者は皆同じ系統のものとみなせよう。とすれば、「藍橋記」を話本の種本と考えるのも、さして不自然とはいえない。『六十家小説』の中には話本の種本もあったと考えてもよいので

はなかるうか。

それではなぜ「藍橋記」は種本の段階にとどまり、「話本」として残されなかつたのであろうか。それは、「藍橋記」が書きとめられたころには、もうこれを語る、或るいは語ろうとする小説人がいなかった。言いかえれば、當時すでに話本として成立していなかつたためではなかるうか。冒頭と末尾に残された韻文が、一時は話本として成立していた痕跡ではなかるうか。同じ『清平山堂』に收められる「風月相思」(熊龍峯)の「馮伯玉風月相思小説」も「藍橋記」と同様で考えてよいように思われる。しかし、こちらはもとが明代の話であるから、一度も實際には語られなかつたとも考えられよう。

六

ところで、『綠窗新話』も『醉翁談錄』も小説人の種本集の役割を果たしたであらう。しかし、これらに收められている話のすべてが話本の種本とは言いにくいように思える。というのも、『綠窗新話』の場合など、上巻と下巻の編輯態度に大きな違いがあるように見えるからである。『綠窗新話』の下巻は樂器・音楽・踊りに關する話や、氣のきいた言葉のやりとり、笑い話といったすじのない話が多くなっている。下巻は小説人以外を主な對象とした種本集だつたとも考えられまいか。もしかしたら説話人以外の庶民もこの書物を讀んでいたかもしれない。とすれば、話本の種本のように見える話ではあつても、全部が全部小説人によつて語られていたと考へるのは危険なところ。小説人の必讀書であつたから『太平廣記』がすべて語られていたと考へると、それは大差がないと言えよう。しかし、この辨別は事實上不可能である。従つて、まとまつた、すじを持った話は話本の

種本である、と『綠窗新話』においてはみなさざるをえない。

それでは『醉翁談錄』の方はどうか。事情はより以上に複雑である。種本と思える話もあれば、單に詩や詞を羅列したにすぎないものもある。そのうえ、甲集から癸集までの十集、各二卷よりなる『醉翁談錄』の構成そのものが、明代の「通俗類書」にすこぶる類似しているのである。『醉翁談錄』は「通俗類書」の傳奇小説と「話本」などを除いた部分、孫楷第に叢雜瑣語とされた部分とほぼ同じ體裁・内容をしているのである。「通俗類書」中の孫楷第が注目した部分はほとんど元以降の成立のものである。とすれば、『醉翁談錄』は元初の「通俗類書」であるといってもさして不自然ではあるまい。先に述べた各集とも二卷に分かれていることや、煙粉歡合・重圓故事が重出していることも、「通俗類書」が上下二層に分かれるのと何か関係があるかもしれない。

そこで振り返って『綠窗新話』の方であるが、これも「通俗類書」との関係が考えられるのである。『繡谷春容』の卷四・卷五の下層には『新話撫粹』という部分がある。ここには合計百七十八則の話が収められているが、そのうち實に百二十二則が『綠窗新話』所收のもの、と、「評曰」の部分も含めて一致するのである。『綠窗新話』に入っていないながら『新話撫粹』に収められなかった話は三十二則にすぎず、この三十二則についても、他の卷に違った形で収められているからと『新話撫粹』に収められなかったであろう理由が推定されるものもある。とすれば、この兩者の實際の關係は百二十二という數字の示すもの以上となる。『新話撫粹』は原『綠窗新話』にもとづきつつ、改訂が加えられてつくられたものではなからうか。いずれにせよ、これら百二十二の話は現『綠窗新話』の校訂資料となりうるのである。

しかし、『新話撫粹』中に新たに發見された五十六の話は更に注目される。この中には明らかに元明の話もあるが、それ以上に唐宋の話、すなわち原『綠窗新話』に入っていたとしても不自然でない話があるのである。この『新話撫粹』については改めて論ずるつもりではあるが、話本研究にとり、非常に重要な資料が發見されたといえよう。

ところでこの『新話撫粹』は、上卷が十二類、下卷が十一類に分かたれている。原『綠窗新話』もこのようであったとすれば、體裁の面からも、『綠窗新話』は『醉翁談錄』と似通うことになる。ともかく、『綠窗新話』も『醉翁談錄』と同じく「通俗類書」であり、庶民もこれを目にしてきたと考えてよからう。いままでは話本の種本集という面ばかりが強調されてきたが、この面からのアプローチも兩者には必要と考えられるのである。

七

それでは、南宋から元初にかけての「通俗類書」には、ほかにどのようなものがあつたのであろうか。『清平山堂』所收の「五戒」の末尾に次の句がある。

雖爲翰府名談、編入太平廣記。

この部分を馮本の「東坡傳」は次のように書きかえている。

後爲翰府名談、謄入燕居筆記焉。

これに類した表現を「話本」及び「讀本」の中から拾ってみると次のようになる。

陳巡檢梅嶺失妻記

雖爲翰府名談、編作今時佳話。

鄭元和嫖遇李亞仙記

雖是青樓新語、編入幽谷生春。

勘皮靴單證二郎神(『醒世恒言』卷十三)

原係京師老郎傳流、至今編入野史。

「編作」はひとまずおくとしても、「編入」については一考を要しよう。太平廣記・幽谷生春もしくは野史という書物の中にこれらの話が編入されていた時期があったということになるからである。ここではとりあえず太平廣記を問題にしてみよう。

といったところで『太平廣記』(以下『廣記』と略す)には東坡佛印の話は載っていないし、類話もない。東坡の話が『廣記』などに入っているはずが土臺ないのである。だが、「五戒」の記載が誤りとしても、問題点はまだある。『醉翁談錄』壬集卷一に收められる「紅綉密約張生負李氏娘(以下張生と略す)」の冒頭の「京師貴官子張生、因元宵遊乾明寺」の句の原註に

據太平廣記云慈孝寺

とあり、末尾に次のようにある點である。

事見太平廣記

この話も宋代の話である。稻田尹氏はこの點について「已の説話を價值づける爲、廣記によるが如く述べた。」と述べている。しかし、もともと『廣記』に載っているはずがないのに、やはりこのように書かれているとすれば、これらの話を含んだ太平廣記もあつたのではないかと考えられよう。それは李昉らが編した『廣記』ではなく、坊間のもの、「通俗類書」だつたのではなからうか。

この「太平廣記」(以下、この推定の書物を指す場合「」を附す)の最も早いものは『醉翁談錄』以前に刊行され、「張生」を収めていた

と考えられる。また、後の『燕居筆記』と同様、何度も増補改訂がなされ、最後のころには「五戒」のような「話本」まで収めたものになつていたのでなからうか。小説人が幼いころから習つた太平廣記とは、初期のこの「太平廣記」だつたとも考えられよう。だが、この種の書物が目録の類に著録されることはまず考えられない。とすればその存在の證據はこれからも得られないであろう。それではこの「太平廣記」と、李昉等の編した『廣記』との關係はどう考えればよからうか。

『廣記』は談刻本の談愷の序と『玉海』所引『宋會要』の記述により、宋代には流布しなかつたかのように考えられがちだが、北宋末に節略本『鹿革事類』・『文類』(各三十卷)があつたことも、南宋に刊本、完本か否かは不明(『京本太平廣記』があつたことも確かである。このことは、北宋で沈約や蘇東坡が、南宋で洪邁や陳振孫が『廣記』を見ているらしいことから傍證されよう。しかし、三十巻というのは同じ小説人の必讀書である『綠窗新話』の二巻に比べて多すぎるし、庶民が座右におくにも手頃とはいえないように思える。機にさとい書肆が『綠窗新話』ほどに『廣記』の規模を縮め、話も刪略し、當代の有名な話をつけ加えなどして新たに刊行したと考えても、それほど不自然とはいえない。こうして「太平廣記」は成立したのであろう。當時、「太平廣記」と『廣記』は併行して世に行われていたと考えられる。その状況は後世における『夷堅志』の流布と類似したものだったと考えられる。

『夷堅志』は洪邁により、南宋中期に順次刊行された四百二十巻よりなる大部な志怪書であり、やはり小説人の必讀書であつた。しかし、後世には流傳が少なく、元代には僅か四五巻の坊本が最も一般に

行われていたといふ⁽⁴⁾。小説人の見ていたものはたぶんこの程度のものであったのではなからうか。ところが、この『夷堅志』も明代に入り、新たに編集刊行された。嘉靖二十五(一五四六)年に清平山堂が刊行した『新編分類夷堅志』と、萬曆二十九(一六〇一)年に世徳堂が刊行した『新刻夷堅志』がそれである。この二書により、一部ではあるが、文人に『夷堅志』が開放されることになったのである。

ところで、この後に『新訂増補夷堅志』という五十巻の書物が武林の讀書坊より刊行された。これは新編分類本にもとづき、いくつかの話を削り、鍾惺による増補と批評とを加えたと銘打っている。もちろんこれがそのまま事實であるとは、とても思えない。しかし、ここで問題にしたいのは鍾惺の増補批評の眞僞云々ではない。本来の書物になかった話も、その名のもとに収められることが、「通俗類書」が刊行された明末にはあったということである。南宋から元初にかけては『歳時廣記』・『事林廣記』・『詩林廣記』の類の書物も刊行された時代であるから、これと同様のことが『廣記』について行われたのではないかと推測することも、あながち不自然とも言えない。「太平廣記」が刊行されたかもしれないという状況を考慮に入れるなら、稻田氏のように考えにくくなる。

それでは、幽谷生春や野史といった書物も存在したのであろうか。確證はないが、前者については『國色天香』・『繡谷春容』らとの書名の發想の類似から、後者については萬曆四十八(一六一〇)年刊の『客座所述閒情野史風流十傳』なる傳奇書の存在から、そのように考えることもできるのではなからうかと思われ。話本研究の第二の方法については以上を問題として提起し、宋代における話本の發展とその特徴については別の機會に論ずることにしたい。

註(1)

小論において、話本と「話本」は定義及び用法を異にして用いられている。このほかにも特殊な定義・用法が多い。これらについては詳しく論ぜられるべきであるが、今はその餘裕がない。そこで、それらについて簡略にここで述べておくことにしたい。

話本 説話四家の一つである小説個々の内容及び語り口を指す。「話本」

期には入話と「話本」により構成されていたらしい。

「話本」 小説の口述筆記の類。これにより「話本」期の話本の様子が伺える。

入話 「話本」では多くの場合、入話という言葉だけでその存在が示されるもの。

「入話」 正文の前にある部分の總稱。

「話本」 話本の話の部分であり、「話本」として残された部分にはほぼ相當する。

正文 「話本」、即ち「話本」の主たる話。

「讀本」 馮夢龍により完全に讀み物として改變された三言中の「話本」讀本 「話本」の體をかりた創作作品。

種本 小説人が、「話本」のあらずじや原話との相違点を簡単に、文言もしくは文言のまま記したもの。

話本期、多くの小説人による語りもの時代の。宋代を中心とする中唐から元初にかけて。

「話本」期 「話本」が成立し始めて以降。元から明の萬曆ころまで。「讀本」期 「讀本」の成立した時期。讀本期に含めてよい。

讀本期 讀本が成立して以降。なお、更に本文の當該箇所を見られたい。

(2) 『京本通俗小説』所收のテキストは僞作とみなし、小論では論じない。長澤規矩也「京本通俗小説の眞僞」(『書誌學論考』所收)馬幼桓・馬泰來「京本通俗小説各篇的年代及其眞僞問題」(『清華學報』新五

(3) 『日本東京所見中國小説書目』卷六附録の(一)など。

- (4) 長澤規矩也「現存明代小説書刊行者表初稿(以下長澤表と略す)」上
 『書誌學』三の三は「萬曆戊戌(三三〇)刊と誤る。」
- (5) この世徳堂は、萬曆二十年代に『西遊記』などを刊行した金陵の書肆
 とは異なるか。「長澤表」上では「萬曆中」刊とする。鄭振鐸や王重民
 も同様。「明清二代の平話集」(『中國文學研究』所收)、『美國國會圖書館
 藏中國善本書目』。なお、王利器輯の『歴代笑話集』によれば、世徳堂
 刊の『繡谷春容』には二種類の版本があるらしい。同書に書影があがっ
 ている方は、東文研藏本とは異なり、刊行の時期もやや後と推定される。
- (6) 萃慶堂は萬曆三十一年に『鐵樹記』を、同時期に『呪棗記』・『飛劍
 記』を刊行している。内閣文庫の目録は「明刊」とし、「長澤表」上は
 「萬曆中」刊とする。なお、孫楷第はこの書物を前掲書中でとりあげて
 いない。
- (7) 「長澤表」下(『書誌學』三の五)は「萬曆中」刊、内閣文庫の目録
 は「清刊」、孫楷第は「明季刊本」としている。なお、明代の金陵の書
 肆に大盛堂がある。これに□盛堂が該当するのではなからうか。大盛堂
 は富春堂が萬曆二十一年に刊行した『搜神記大全』を重刊している書肆
 である。(『東大東文研蔵』)
- (8) 孫楷第前掲書は「清初刊」とする。以上三種の『燕居筆記』はいずれ
 も増補とか重刻とか銘打っており、これらより古い原刊本の存在が考え
 られる。しかしまだこれは発見されていない。以上の三種の『燕居筆
 記』を小論では、それぞれ林本・何本・馮本と略稱することにす。な
 お、このほかにも清代の坊刻本があるが、「話本」は収められていない。
- (9) 「話本」の原文は俗字・略字が多いが、以下正字になおし引用するこ
 とにする。テキストとしてはそれぞれの原本、もしくは影印本を使用し
 た。
- (10) 「通俗類書」中の「話本」では、何本所收の「柳耆卿詠江樓記」だけ
 がこの文字を冒頭に有している。
- (11) この点について、玩江樓を例にとり、更に考えてみよう。馮本以外の
 「通俗類書」に收められる四種のテキスト間には、個々の文字の相違、
- 誤字脱字等があつても、すじにかかわるようなそれは見られない。とこ
 ろが、馮本の「玩江樓記」にはそれがある。他のテキストでは「與周月
 仙相別、自回京都」となつてゐるところが「與周月仙同歸京都、四妓調
 和、無爭妬者。」に變つてゐるのである。玩江樓は『清平山堂』にも収
 められてゐるが、そこでも前者のようになつており、後者のようにはな
 つてゐない。このほか、周月仙の詠んだ詩が繰返されぬ点、「柳縣
 宰見月仙果然生得」とあるところが「柳縣宰見那月仙果然生得標。致、
 但見」となつていたりする點も同様であり、やはり後人による改變がな
 されてゐるように思える。しかし、『清平山堂』所收のものとの他の四種
 がほぼ一致しているというわけでもない。前者の末尾の、二首目の詩が
 後者にはないからである。しかし、これは重大な相違とは考えられな
 い。四種のテキストはほぼ「話本」の原形をとどめてゐると考えてよい
 だらう。
- (12) 『清平山堂話本』上海古典文學出版社、一九五七年刊。
- (13) 『中國通俗小説書目』卷三明清小説部甲。
- (14) 「風月瑞仙亭」は末尾を缺いてゐるが、「正是」の後に詩があり、全
 篇が終つてゐたのではなからうか。これを馮夢龍は改變し、冒頭の詩
 を「衣錦還郷」の後に移動させ、そのかわりに「日月盈虧」云々の詞を
 増補し、
- 司馬相如本是成都府一個窮儒、只爲一篇文字上投下至尊之意、一朝發
 跡。如今再說南宋朝一個貧士、也是成都府人……
- と詩に續けて書き、正文に繋げたのであらう。
- (15) 同註(13)
- (16) 山口建治「戒指兒記」と『聞雲菴阮三償冤債』(『集刊東洋學』二十
 九)にこの兩者の比較が詳しくなされてゐる。
- (17) 『元曲選』には「月明和尚度柳翠」なる元・無名氏(李壽卿と推定さ
 れる)の作品が收められてゐる。とすれば、柳翠の話は「話本」として
 より元曲として、まず成立したのではなからうか。一方、『書目』に紅
 蓮記が著録されてゐることから、紅蓮女は兩者の中間に成立したものと

考えられる。とするならば、紅蓮女のいう月明和尚度柳翠は元曲であるかもしれない。なお、徐渭の『四聲猿』の一つ「玉禪師翠鄉一夢」が、脈望館鈔本では「玉通和尚罵紅蓮」及び「月明和尚度柳翠」の二巻に分けられていることも、紅蓮女と月明和尚度柳翠が姉妹篇であったことの傍證となるかもしれない。「話本」月明和尚度柳翠は嘉靖年間に成立したのであろう。なお『續谷春容』の題、及び馮本の目錄題は、「話本」が「通俗類書」に収録される際、誤ってつけられたものであろう。又、小野四平『明悟禪師趕五戒』論、『文化』三十一の一〇参照。

(18) 同註(13)

(19) 岩城秀夫「還魂記の藍本」(『吉川博士退休記念中國文學論集』所收)。

なお、孫楷第は『中國通俗小説書目』の中で「杜麗娘慕色還魂」も「杜麗娘記」も「並以文言演之」といっているが、これは誤り。

(20) 同註(3)

(21) 入話なる言葉は「話本」の冒頭のはか、「醒世恒言」卷三十五「徐老僕義憤成家」にも次のように見える。

適來小子道這段小故事、原是入話。還未曾說到正傳。……

しかし、「徐老僕義憤成家」の正傳は嘉靖年間の話である。とすれば、もとなつたテキストがあつたとしても、その後の成立とならう。到底「話本」の冒頭にある言葉と同等に考へるべきものとは思えない。この部分も馮夢龍により増補されたものであろう。なお、莊因はこの言葉を「明代人續加上去的」といっているが、根據は擧げられていない。『話本楔子彙說』

(22) 『醒世恒言』卷三十三の「十五貫戲言成巧禍」には、

且先引下一個故事來、權做個德勝頭頭。

とあり、同卷六「小水灣天狐詭書」には

只爲在下今日要說個少年、……故把銜環之事、做個得勝頭頭。

とある。一方『古今小説』卷十五の「史弘肇龍虎君臣會」には

說話的、你因甚的頭回說這八難龍笛詞。

とある。「十五貫戲言成巧禍」と「史弘肇龍虎君臣會」がもつた「話本」は「書目」に著録され、「小水灣天狐詭書」も宋元の「話本」にもとづくのではないかと推定されている。とすれば、これらの言葉も「話本」の中にもとからあつた、と考へてもよいのではなからうか。

(23) 入話という言葉は「從此進入話本正文」と解釋する説もある。しか

話本と「通俗類書」

し、この説では「竟」という文字の解釋がつかない。莊因前掲書。

(24) 長澤規矩也『清平山堂』熊龍峯「刊行の話本に就いて」前掲書所收。

(25) 『東京夢華錄』卷五「京瓦伎藝」にみえる「頭回小雜劇」の頭回とも關係があるかもしれない。なお「頭回小雜劇」については入矢義高「北宋の演藝」上「東光」八が詳しい。

(26) 一旦聽下回分解なる言葉は章回小説のトレード・マークであり、ここでは同ごとに必ず使われる。この場合の下回の意味は「話本」におけるその意味を考へる際、あまり参考とはならない。「水滸傳」以外の章回小説はこの言葉を「話本」から借用したと思われるからである。

「平話」はこの言葉が見えないのもその證據にならう。なお、「水滸傳」はこの言葉があるのは、「話本」から受け継いだためと思われる。「水滸傳」の性格について(『東方學報』京都十二の三)参照。

(27) 『醒世恒言』卷三十八「李道人獨步雲門」は大道藝人の場合を述べているが、互子においても同様ではなからうか。

(28) 馮夢龍がこの「且聽下回分解」なる言葉をつけ加えたとも考へられようが、「太平廣記」・「笑要頭回」・「話本說微 權作散場」などの例から考へ、刪去されずに「話本」から残されたと思へる方が自然であらう。

(29) 衍慶堂刊『醒世恒言』には、卷二十・卷二十一の兩卷に、本來卷二十に收められるべき「張廷秀逃生救父」を收めているものがある。この「恒言」の卷二十の末尾は次のようになっている。

廷秀脫身不得、只得住下。且聽下回分解。

しかし、『醒世恒言』の最古の刊本、葉敬池刊本ではこの部分が次のようになっている。

廷秀脫身不得、只得住下。這叫做

情知不是伴、事急且相隨

とすれば、この言葉は二巻に分けるために衍慶堂により補われたものと考へられよう。ちやうど『京本通俗小説』の「破玉觀音」と逆の關係にあるではなからうか。

(30) 「讀本」では「警世通言」卷十二「范鐵兒雙鏡重圓」の例がある。これは「交互姻緣」と「雙鏡重圓」という二つの話本から成り立っている。

(31) 『綠窗新話』は卷下「麻奴服將軍鴛築」の中で許慎のことを許謙と記

している。(『藝文雜誌』一の五。及び『繡谷春容』所收『新話撫粹』の「麻奴服將軍齊栗」) この話自體は『樂府雜錄』にもとづくものだが、問題の部分は『綠窗新話』のオリジナルになる。また兩テキストとも誤字の多いものではあるが、許慎を許謙とうかつに誤るとは考えにくい。とすれば、『綠窗新話』は孝宗趙普(慎の古字)以降、すくなくとも宋代成立のものと思つてよからう。「醉翁談錄」については南宋刊、元初刊の兩説があるが、元初とみる説に賛成したい。

(32) 曾慥の『類說』所收の『傳奇』中の「裴航」にも同様の文句がある(卷三十二)。これについては種々の狀況が考えられ、簡單には述べられないが、種本により話本研究を進める場合、『類說』が重要な資料となるとだけは言えよう。

(33) 同註(3)

(34) 一九五七年に上海古典文學出版社より刊行された『綠窗新話』の校勘者も、『新話撫粹』の存在には氣がついてはいるらしく見える。というのでも、下巻の二つの話、「陳處士暫寄師叔」及び「李太監傳語懸君」の中でこれに言及しているからである。しかし、残り百二十の話の校勘資料ともしないし、「校正引用書目」の中にもあげていない。とすれば、この書の校勘者は『新話撫粹』の全體を見ていないのではないかと考えられる。それでは何を見たのであろうか。この前年、同じ出版社より『歷代笑話集』が刊行されている。この書の中に「新話撫粹」が二種收められている。この「一」の方を『綠窗新話』の校勘者は座右に置いてはなからうか。ちなみに、前記二則はともにこれに收められている。「綠窗新話」が「新話撫粹恢復諸類」といつているのもその證據となる。なお、「一」に收められる六則中ではあと二則、「却更然獨照四子」及び「陳沈嘲道士啗肉」が『綠窗新話』と共通するが、ここでは『新話撫粹』は言及されていない。これは校勘の仕方が一定せず、校勘者が復讐のように思えることと關係があるかもしれない。註(5)参照。

(35) 『綠窗新話』に「醉翁談錄」と共通な話が十一則も含まれていること、『綠窗新話』が「通俗類書」であることの證據とならう。

(36) 「醉翁談錄と太平廣記」(『神田博士還曆記念書誌學論集』所收)

(37) 「張生」の話は陳元頤の『歲時廣記』に引かれる『惠敏拾英集』にも收められるが、そこではこの原註がいうように

天聖二年元夕、有貴家出游、停車慈孝寺側。

と書かれている。とすれば、原註の太平廣記は『歲時廣記』の誤りにすぎないかもしれない。しかし、『歲時廣記』は話の後半を収めていない。それなのに「張生」が末尾でわざわざ「事見歲時廣記」とことわるのは不自然に思える。なお、この話は『新話撫粹』にも「張生元宵會帥妾」と題して收められている。原『綠窗新話』にも入っていたのではなからうか。

(38) 「遂初堂書目」に著録される京本太平廣記がその最初のものではないかと題名より推定される。しかし、根據がない。小論では一應『廣記』の系統のものと見ておきたい。

(39) 『太平廣記』(人民文學出版社、一九五九年刊)「説明」による。「直齋書錄解題」卷十一の「夷堅志」の項に次のようにあるし

今邁亦然。晚歲急於成書、妄人多取廣記中舊事、改竄首尾、別爲名字以投之。至有數卷者、亦不復刪潤、徑以入錄。雖敘事猥穢、屬辭鄙俚、不恤也。

また「夷堅支癸序」に次のようにもある。

唐史所標百餘家六百三十五卷、班班其傳、整齊可觀者、若牛奇章・李復言之玄祐、……餘多不足讀、然探賾幽隱、可資談暇、太平廣記率取之不棄也。

とすれば、陳振孫・洪邁の時代には『廣記』が存在した可能性はあるといえよう。なお、王辟疆も『唐人小說』(上海古典文學出版社、一九五五年刊)の「補江總白猿傳」の按語で、陳振孫と同様の見解を述べているが、『廣記』の名は擧げていない。沈約・蘇東坡については王夢鷗の『唐人小說研究三集』(藝文印書館、一九七四年刊)によった。

(40) 愛宕松男「洪邁夷堅志逸文拾遺」(『文化』二十七の四)

(41) 許政揚は『古今小説』(人民文學出版社、一九五八年刊)の前言で「輟耕錄」卷二十七「胡仲彬聚衆」を引き、「勘皮靴單證二郎神」の野史という言葉は短篇小説と同じ意味であると述べている。しかし、兩者を同じ意味とした根據は不十分である。